

NSPA JAPAN

The Natural Science Publishers' Association of Japan

自然科学書協会会報

発行人・本郷允彦
編集・広報委員会



年頭にあたって
社団法人自然科学書協会理事長 本郷允彦

「自然科学の時間—科学の心」
科学者と幻想

早稲田大学人間総合研究センター客員研究員 戸川達男

フランクフルトブックフェア雑感
(株)南江堂 小立鉦彦

2009 1/15 NO. 1

<http://www.nspa.or.jp/>

社団法人 自然科学書協会 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-101 神保町101ビル1階 TEL 03-5577-6301

年頭にあたって

社団法人 自然科学書協会
理事長 本郷允彦



年頭にあたり、協会会員社の皆様に一言ご挨拶を申し上げます。日頃は、当協会の活動に対しご支援ご協力をいただき感謝申し上げます。

昨年一〇月にはおかげをもちまして念願でありました協会事務所を神保町一〇一ビルに設置し、業務を開始することができました。

さて、昨年は長期にわたる出版業界のマイナス成長に加え、アメリカから発生した金融危機が、世界を喧騒し、大恐慌を引き起こし、日本経済にも大きな影響を与えてまいりました。出版業界も素材費の高騰による原価の上昇、消費の低下による購買力の減退などにより、多くの出版社が減収あるいは減益を余儀なくされたのではないかと思います。この傾向は今年も続くと考えられ、今日ほど多難な時期はいままで無いのでは

はないかと思われま。

現在協会では、より幅広い活動を考え、自然科学書の販売強化に努めております。一つは毎年継続している東京国際ブックフェアの自然科学書ブースへの出展のほかに、地域の書店さんの協力をいただき自然科学書フェアの開催を企画いたしております。現在のところ関西地区と東北地区での開催が考えられており、順次他の地域への拡大を図っております。

加えて科学技術週間(四月一三日〜一九日)に表彰式が行われる文部科学大臣表彰への推薦機関として、継続して推薦を実施するために、会員各社から書籍・編集者の表彰の申請を受け、文部科学省に推薦いたしました。

考えております。平成二十二年の文部科学大臣表彰には二社の会員社の申請を受け推薦させていただきます。さらに、科学技術週間では文部科学省が主催するサイエンスカフェに協力し、その開催を企画いたしております。当協会を構成する五団体(理学書総目録刊行会、工学書協会、農学書協会、日本医書出版協会、家政学図書目録刊行会)から講師を派遣し、珈琲を飲みながら講演を聞いてもらい、質疑を重なる一時間三〇分程度の懇談会となる予定です。最後に今年はソウル国際ブックフェア「日本

年」(SIBF)の開催年に当たります(五月二三日〜一七日)。協会としてもSIBFに出展参加するとともに、現在韓国で主流になりつつある自然科学書の翻訳についても書籍展示を通してそのよさを普及させたいと思っております。また、協会としてのSIBF視察ツアーも企画しております。ご案内の折には多くの会員の皆様の参加を期待しております。

これらの活動によって、自然科学の出版物に読者が親近感を持っていただき拡売にも繋げていくことを期待するとともに、協会加盟出版社の書籍や雑誌の宣伝・販売に協力できるのではないかと考えます。

協会を取り巻く環境は、決して順風ではありません。公益法人制度改正問題、消費税問題、著作権におけるトラブル、違法複写問題、複写権センターの運営正常化など、当面する課題を一つ一つ解決していきたいと思っております。そのためには加盟会員の貴重なご意見をいただき、それを反映させ、今後の参考にさせていただき、協会活動の活性化に繋げていく所存であります。

今後とも会員各社の皆様のご支援ご協力をお願いし、年頭の挨拶に代えさせていただきます。

科学者の幻想

早稲田大学人間総合研究センター客員研究員

戸川達男



新年を迎えるにあたり、今回のコラムは、「科学者は多くの『幻想』にとりつかれることが、科学者の素質である」と、長年「生体計測」の研究分野の第一線でご活躍をされておられる科学者 戸川達男先生ならではの説得力のある内容となりました。質は違えども出版者も多くの幻想からよい企画が生まれてくるのではないのでしょうか…。

わたしがとりつかれた幻想

科学者は客観的な事実しか受け入れないので、幻想など持てないはずだと思ってる人もいるが、実際には多くの科学者はさまざまな幻想を持っているし、スケールの大きな幻想を語る科学者の本は、事実だけが書かれている本よりもはるかにおもしろい。好奇心が旺盛なのは科学者としては良い性質であり、幻想にとりつかれやすいのは科学者としての素質がある証拠だと言ってもいいかもしれない。わたしもかつて幻想にとりつかれたことがあるので、こ

の点では科学者の素質があると思いたい。わたしは高校のころJB・ラインの『超心理学』という本を読み、もしかしたら透視のような現象が本にあるのではないかと、自分で実験してみようと考えたことがある。ラインはデューク大学に超心理学の研究所を創って、大規模な実験をやっているとのことだった。方法はたとえば図形を描いたカードを裏返しておいて、被検者に図形を当てさせるといふような単純なものだが、何万回もの実験をくり返して統計処理をして、偶然に起こる確率が何百万分の一というような現象がしばしば起こるといふことであつた。また、念力でさいころの特定の目を出すことができるといふのもあつた。つまり、念力は物理的力としてさいころに作用するというわけである。わたしは数か月間ラインの幻想にとりつかれていたのだが、本当に自分で実験をしようと考えたとき、なぜ物体に働く力を直接測らないでさいころの目が出る確率のようなまわりくどい方法を使うのかというところに疑問を持ち、統計を使うとその後まもなく、フランスの生物学者のジャン・ロスタンの『生命の驚くべきもの』という本を読んで、ロスタンがラインの研究をはっきり否定していることを知った。しかもロスタンはわたしよりはるかに深く超心理学の幻想にはまっていたようで、さまざまな心霊現象と称するたぐいの研究会に熱心に通ったが、結局そのすべてが

誤りであると確信するに至ったとのことである。

ふたたび幻想に出会う

わたしはその後早稲田大学の応用物理学科を卒業し、大学院のころから生体計測の研究を続け、やがて生体計測の専門家と見なされるようになった。そんなあるとき、早稲田大学の研究プロジェクトが主催する「気の計測」というシンポジウムへの誘いがあつた。わたしは気功のことは何も知らないで断つたが、生体計測が専門だったらぜひと言われたので出席することになった。ところがそこで発表された研究は、どれも気という特殊な現象があるという前提の上になされたもので、中立の立場から見れば、気の実在の証明というにはほど遠いものだった。後になって報告書を作るので感想でもいいから原稿を書いてほしいとの依頼があつた。そこで、ポツンともかまわなと思つて、前に述べたロスタンの著書も引用して、超自然現象であるかのような気の実在をはっきり否定する見解を書いて提出したところ、そのまま報告書に掲載された。

プロジェクト研究の報告書などほとんど読まれることがないだろうと思つていたが、たまたま応用物理学科の先輩の目にとまり、気に入ってくれたのか、人間科学部での講義の担当を依頼された。そのとき、これは人間についての未知の領域に関わるこ

とのできる絶好の機会のように思えて、理工学部で担当していた生物工学という講義をベースにして、わたし流の人間科学の講義を作っていくことにした。やがてそれまで勤めていた東京医科歯科大学を定年となり、早稲田大学の人間科学部で五年間専任として勤めることとなった。

人間科学の問題としてぜひとも解明しなければと考へていたのは、意識がどのように発現するのかということである。もちろん意識については多くの研究があるが、意識とは何なのかはまったくわかっていない。意識の発現にはこれまでに知られていない特殊な現象があるに違いないと考へている人がいる一方、DNAの二重らせん構造の発見者の一人のフランシス・クリックのように、意識はニューロンの活動以外の何ものでもないと言断する人もいる。しかし、不思議なことに意識を解明しようとしている人は意外に少ない。以前、「意識の科学」という国際会議に出席したが、それは意識を共通の話題としてとりあげるサロンのようなもので、意識を解明しようという雰囲気ではなかった。意識の解明にこだわるのは、まるで幻想にとりつかれているように思われかねない。

むしろ多くの人の関心を集めてきたのは、無意識であつたようである。いわゆるフロイトの無意識理論によれば、精神活動には広大な無意識の領域があり、意識は氷山の一角にすぎないというのである。最近ではフロイト批判が高まり、広大な無意識

というような説明は受け入れられなくなってきたようなのだが、それでもやはり無意識の領域が若干はあるという考えが普通ではないかと思われる。考えてみれば、フロイトは実に大胆に幻想を語ったわけで、非常に多くの有名な科学者がその幻想に惑わされたことは確かである。

いまのわたしの幻想

無意識について、いまわたしは幻想だと言われてもしかたのないような極端な考えにとりつかれている。それは、精神過程あるいは心としての無意識はまったくないということである。脳の活動には意識のほらない現象はたくさんあるが、それは生理現象であって、意識の内容とは異質の事柄に違いないと考えている。心は意識の内容のすべてであると定義することによって、無意識は心の領域から完全に切り離され、それで不都合が起ることはない。心の理解には、記憶や想起とともに、感情や気分も重要だが、感情や気分は明らかに生理現象であり、生理現象が意識を担っている脳活動に影響を与えていると考えれば、感情や気分とともに心が生物的に必要な機能として進化したことが納得できる。

しかし幻想に終始するだけでは、たとえ自分では納得したつもりになっても、科学にはならない。その点で、科学者は幻想を客観的な立場で検証するという習性をも身につけているところに強みがある。意識

あるいは心を説明するシナリオも、それだけでは幻想に過ぎないかもしれないが、科学的立場で検証する手段を考えることができるし、超心理学の場合のように、検証の方法を考える過程で誤りに気づくこともあるかもしれない。さしあたり、無意識のない心が可能なことを検証するには、無意識がなくても心が機能するような具体的なモデルを構築する必要がある。その方法として、わたしはもう一つの幻想にとりつかれている。それは、意識を発現するようなシステムをコンピュータで作れるはずだということである。もし心の発現に神秘的な現象が必要ないならば、コンピュータでも実現できるはずである。ただし、限られた作業が脳と同じようにできるといっただけではだめで、実際の脳と同じように成長し、自然言語を習得してわれわれと対等にコミュニケーションがとれ、言語で心の内を確認し合えるようなものでなければならぬ。そのようなモデルがここ一〇〇年くらいの間には実現するというのがいまのわたしの幻想であり、しかもわたし自身そのチャレンジに参画できるのではないかと思っている。

■戸川 達男(とがわ たつお)

一九三七年生、一九六〇年早稲田大学応用物理学科卒業、一九六五年東京大学大学院修士、工学博士、東京大学医学部助手、東京医科大学医学部研究助教授を経て一九七二年同教授、二〇〇三年定年退職、同年早稲田大学人間科学部教授、二〇〇八年三月定年退職。現在早稲田大学人間総合研究センター客員研究員。

フランクフルトブックフェア雑感

南江堂 小立鉦彦

「第六〇回フランクフルトブックフェア」が、二〇〇八年一月二日から一九日までの五日間、フランクフルト国際見本市会場で一〇〇か国七三三七社が参加して開かれた。

南江堂の分野である医学系展示館はHall 4 2だが、ドーム球場のフィールド部分ほどあるようなフロアが数階あるHall 1が1〜10まであり、連日、多くの訪問者数と相俟ってこのブックフェアがいかに大規模で、ブックフェアとしては世界最大と思われられる。

小社は元々洋書部がある関係で二〇〇年余にわたりブースを設け活動している。当初は売れ筋の医学洋書の仕入れが主だったが、その後、日本に馴染む洋書翻訳権の取得、そして近年は自社出版物の翻訳権の譲渡という具合で、参加意義も進歩的変遷を遂げてきた。

特に近年、韓国をはじめとするアジア諸国が、日本書籍の翻訳に積極的で、翻訳権交渉目的の版元や業者が会場で闊歩し、もちろん彼ら自身の出版物の売込みもさまざま、韓国、中国の展示フロアは広大で豪華で、訪問者動員もかなりであった。最近の世界経済動向の縮図ともいえる。ほかに、デジタルコンテンツ展示台頭の増幅もいうまでもない。

毎夕方になると、世界に名だたる外国

版元のワインサーピスがそこかしこのブースで始まり、昼間の〈真剣勝負〉は一転、華やいだリラックスした雰囲気醸し出される。そして夜の各大手出版社主催のレセプションへと散っていく。その宴は深夜まで続くケースが多い。生真面目な日本にはない発想で、まさにわれわれ出張者にとっては、夕方から大いに癒されワクワクする時間帯に入るわけである。皆さんフランクフルトへ行きましょう!!

出版・印刷人の集いに協賛

「第二一回出版人・印刷人の集い」(主催…東京都印刷工業組合出版メディア協議会、協賛…自然科学書協会、出版協会)が、一月一三日、日本出版クラブ会館で開催。講演会と懇親会に三団体から一四五名が参加した。

講演会は、臨床診断士・精神保健福祉士・シニア産業カウンセラーの松本桂樹氏(早稲田大学・法政大学院兼任講師)が「メンタルヘルス問題の傾向と対策」というテーマで、現代病として急増しているうつ病について講演した。懇親会は、青木宏至出版メディア協議会会長、大坪嘉春梓会理事長挨拶に続いて、本郷当協理理事長の乾杯の発声で始まり、和やかな雰囲気の中で三団体の会員交流が図られた。

年末会員集會に一〇七名が参加

不況、不況の声が吹き荒れる中で、当協会恒例の年末会員集會が去る一二月四日(木)一八時より東京會館(千代田区)一階シルバールームで開かれた。会員社代表と各専門委員会委員を合わせた四三社九一名に、取次・関連業界の方々一六名の総勢一〇七名が参加した。

開會にあたり本郷允彦理事長から会員社およびご出席の皆様のご支援・ご協力に対して御礼の挨拶があった。

来賓挨拶に立った山崎厚男トーハ社長も「良いことはなかった。来年は、協会あげてこういう本を読んで欲しいと、読者にPRする企画を立てて欲しい。そういうことには応援する」と述べた。

続いて橋昌利日本出版販売専務取締役は「今年もまた良い年ではなかったが不況は書店にはビジネスチャンスだ。遠くに出かけないで本を買うようになる」と話した。

牛来辰巳理事の元気な乾杯の発声で懇親会は始まり、暗い話題の多い中で開かれた師走の集會にもかかわらず、各テーブルではなごやかに交流が行われた。

【第五八期理事会・委員会開催一覽】

(二〇〇八年一〇月～二月)

●理事会

・一〇月二三日(木) / 一五～一七時 文化産業信用組合

・二月三日(木) / 一四～一六時 日本出版クラブ会館

・二月四日(木) / 一六～一七時三〇分 東京會館

●専門委員会

・二月三日(木) 広報委員会 / 一三～一四時 日本出版クラブ会館

・二月四日(金) HPワーキンググループミーティング / 一三時三〇分～一五時三〇分 自然科学書協会事務所

・二月七日(月) 常務理事会 / 一〇～一二時 日本出版クラブ会館

・二月七日(月) 公益法人特別委員会 / 一三～一五時 日本出版クラブ会館

・二月六日(水) 著作・出版権委員会(転載許諾ガイドライン説明会) / 一五時～一七時 日本出版クラブ会館

・二月二日(火) 販売・出版委員会 / 一七時三〇分～一八時三〇分 文化産業信用組合

・二月二日(金) HPワーキンググループミーティング / 一三時三〇分～一五時三〇分 自然科学書協会事務所

○分 自然科学書協会事務所

【その他】

◆二月二日(火) 新公益法人制度に関する説明会 / 一四～一七時三〇分 文部科学省 東館

◆二月二三日(木) 出版・印刷人の集い / 一六時三〇分より 日本出版クラブ会館

◆二月四日(木) 年末会員集會 / 一八時より 東京會館

◆一月二五日(木) 新年会員集會 / 二～二四時 日本出版クラブ会館

【事務局だより】

〈当会代表者の変更〉

●株式会社 学窓社
旧代表者：田中敏昌 新代表者：山口啓子

●株式会社 金芳堂
旧代表者：柴田勝祐 新代表者：市井輝和

●株式会社 新興医学出版社
旧代表者：服部秀夫 新代表者：林 峰子

●社団法人農山漁村文化協会
旧代表者：坂本 尚 新代表者：伊藤富士男

●社団法人農山漁村文化協会
副委員長：伊藤富士男

●国際委員会副委員長就任
副委員長：伊藤富士男

●著作・出版権委員会委員の変更
●実教出版株式会社
旧委員：武長義雄 新委員：今里美幸

●住所変更
●株式会社学協会出版センター
旧住所 東京都文京区本郷六―一―一〇
新住所 東京都台東区上野一―一四―三
天龍ビル三階

●電話
(営業部) 〇三―五八七―七〇二三
(編集部) 〇三―五八七―七〇二四
FAX 〇三―五八七―七〇二五

第五七期/第五八期広報委員

〈担当常務理事〉 山本 栞(培風館)

〈委員長〉 曾根良介(化学同人)

〈副委員長〉 新谷滋記(工業調査会)

森田 猛(緑書房)

朝倉誠造(朝倉書店)

高杉 昇(家の光協会)

長 滋彦(技報堂出版)

牛来真也(コロナ社)

三宅恒太郎(彰国社)

田中久米四郎(電気書院)

遠矢良太郎(南江堂)

編集後記

お正月。お屠蘇、雑煮とお節で祝って近所の氏神様に初詣。これでわが家の儀式(行事)はおしまい。そのあとは、炬燵の上の蜜柑と南京豆。休み明けまでこれで過ごします。この籠城で欠かせないのが数冊の本。そのための楽しみは暮の本屋さん。休みを控えてゆつくりと、仕事を離れてあれこれ本たちと巡り合う。むしろ読んでいられる充実した時間です。文芸本はさておいて、いわゆる「〇〇新書」の類が目にとまります。手軽でちよいとした専門の教養が身に付きそう。蜜柑でページが汚れるのを気をつけければ絶好の「兵糧」になりそうです。ところが専門出版社に身を置く身としては何となく釈然としません。折角の「著作」が薄まってしまっています。著者が新書に食われちゃって。専門領域の本は、その本にふさわしい形と風格を持って出版されたいと思っているのではないのでしょうか。何とか多数数に對抗する、フェアの開催だけでなく、例えば流通を「共同化」するとかして、個性に満ちたそのままの一冊一冊が「NSPA Library(もつと)かっこよいネーミングで」の統一ロゴなんかをつけて、いつも書店の一角に大きく棚を占める。圧倒的な存在感。一瞬の「幻想」?。今年がよい年になりますように。

(K・M)